



岐阜県教育懇話会
〒509-0108
各務原市須賀町4-291
(株)後藤野井場内
Tel. 058-370-1510
口座番号 00800-3-5390

綱領
「われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中正な教育を推進する。
われわれは教養と品位の向上につとめ、真実愛の精神とともに、明るく純粋な教育を研修する。
われわれは個人の自主尊厳を尊重しつつ、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。」

後、復活して現在に至っている。
従って昭和四十二年以前の学校教育では、

それでも来年度から使用される教科書は多少改善され、写真に両陛下が被災地を見舞われるものが加わり、国民に寄り添われる姿がうかがえるようになった。それは結構なことだが、キャプションは相変わらず「被災地を訪問し、人々をげげます天皇・皇后両陛下」となっている。
NHKがこの六月に公表した「日本人の意識調査」によれば、天皇に対して「尊敬の念をもっている」と答えた人が平成二十年以来、年々増加し、本年は四十一%となつて、調査を始めて四十五年間の最高であつたという。その他「好感をもっている」の三十六%と合わせると、八十%近い人が天皇陛下に良いイメージを感じていることが明らかになった。

巻頭言

学校における「天皇・皇室」の指導

岐阜県教育懇話会事務局長

橋本秀雄

本年五月一日、二百年ぶりの譲位による御代替わりが実現した。
文部科学省は四月二十二日付で「天皇陛下の御退位及び皇太子殿下の御即位に際しての学校における児童生徒への指導について」という通知で、「退位を決めた皇室典範特例法」と「国民ごぞつて祝意を表すため即位の日と即位礼正殿の儀の行われる日を休日とする休日法」の趣旨にそつて、祝意を表する意義を児童生徒に理解させるようにとの指示を出した。

文部科学省は四月二十二日付で「天皇陛下の御退位及び皇太子殿下の御即位に際しての学校における児童生徒への指導について」という通知で、「退位を決めた皇室典範特例法」と「国民ごぞつて祝意を表すため即位の日と即位礼正殿の儀の行われる日を休日とする休日法」の趣旨にそつて、祝意を表する意義を児童生徒に理解させるようにとの指示を出した。

休に入る直前に学校へ届いたと思われる。従つて学年主任や学級担任まで趣旨を周知するのは難しかったのであろう。金曜日の帰りの会で、十連休になつた理由を説明したぐらいであつたとの現場の声も聞く。

我が国において「天皇・皇室」の御存在は、国柄を規定した憲法第一章にあるとおり、大きな意義がある。ところが学校教育での扱いは不十分であつたと言わざるを得ない。

昭和四十三年の小学校学習指導要領（以下、指導要領）から六年生社会の内容の取り扱いに「天皇の地位については、日本国憲法に定める天皇の国事行為に関する行為など児童に理解しやすい具体的な事項を取り上げ、歴史に関する学習との関連も図りながら、天皇について理解と敬愛の念を深めるようにする」との文言がようやく入つたのである。しかし、昭和五十二年の改訂でこの部分がほとんど削除されてしまい、その



天皇の国事行為 大使の任命を行っています。

6年小学校社会科教科書より
文書は都道府県教委を通じて各学校へ伝達されるため恐らく連

出た。
文書は都道府県教委を通じて各学校へ伝達されるため恐らく連

天皇に関する指導は行う必要がなく、指導要領に明記されてようやく指導をされるようになった。けれども、現行の教科書を見る限り、指導要領の言う「理解と敬愛の念を深める」ような教材は見当たらない。従つて指導もできていないであらう。

この写真は、ある教科書の国事行為「官吏の任免」を示したもののだが、「大使の任命を行っています」というキャプションは指導要領の「敬愛の念を深める」には相応しくない。小学校の社会科教科書は三社が作つているが、天皇陛下という敬称はあるものの、ほとんど敬語が使われていない。過去の天皇の記述はともかく、今上陛下や皇族方に対して、敬語を省くべきではないと思う。でなければ執筆者を始め教科書作成の関係者全員、さらに文面をそのまま読む教師も含めて敬愛の念を持つていいのか疑わしいと、敬語に敏感な子供は感じるのではないだろうか。大人が敬意を表さなければ、子供が敬意を払うはずがないのである。

これは戦後教育により、天皇や皇室について理解が進み、敬愛の念が深まつたのではない。昭和と平成の天皇陛下が、常に国民の安寧を祈り続けられ、いついかなる時も国民に寄り添われてこられたことを、国民が皆認識してきたからに違いない。
令和の時代に入り、今上陛下は御歴代の天皇を手本に確かな歩みを始められた。この秋には即位礼・大嘗祭も行われる。この機に教師も親も「天皇・皇室」を学び直し、学校や家庭において子供達に正しく伝えていかなければならない。(九月十一日記)

〔時論〕

モラルサイエンスに基づく

新たな道徳教育学の樹立をめざして

麗澤大学特任教授 高橋史朗

いじめ問題と道徳教育

平成23年9月に起きた、大津市立皇子中学校のいじめ自殺事件は、その半年前まで文科省の「道徳教育実践研究事業」推進校であった。その意味するところ、いじめ問題に対しては、従来の道徳教育では限界があるということであった。それがきっかけとなって道徳の「教科化」が進められることとなった。

長年教育再生会議の委員を勤めた曾野綾子さんは、いじめ対策について次のような指摘をしている。

①いじめ問題は、人間の本質に迫る深いやり方が必要で、制度や体制を変えても、問題は解決しない。

②人間は自ら強くなると、苛められる側の制度をいくら作っても、問題の解決にはならない。

③教育の本来の責任者は誰か、根本の点にふれないと解決にいたらない。

この意見には私も同感で、自民党の教育再生実行会議の分科会で、いじめ問題について、アメリカの例を説明し、提案したことがある。

アメリカでは49の州で「いじめ法」ができており、そこには教育委

員会の責任、親の責任、地域の責任が法律で定められている。日本でもいじめ対策の法律を作ることを提案し、その草案作成にかかわったが、親の責任については大幅に修正された。いじめ対策はこうした法律より予防が大切で、その鍵は親にあり、家庭教育こそ重要なのである。

家庭教育の啓発運動

それに着目したのが台湾である。

2003年に家庭教育法が制定され、「家庭教育講師団」を設けて、「道徳教育は家庭から」を主題に、私もその実現に全面的に支援した。日本でも8県6市で家庭教育支援条例が制定され、その準備が進められている。

文科省は教育再生会議で「脳の発達段階に応じた道徳教育内容」として、科学的な視点から、道徳性を究明しようとした。それは、価値観の強制ではなく、子供の心の中には価値観が内在している。その発達を促すには、段階に応じてどう関わったらいいかを科学的根拠に基づいて明らかにすることへの提言であった。

心理学者等の注目する「共感」

ニューヨーク大学の心理学者ホフマンは、道徳教育の目的は自己統制を発達させることだとし、そして、共感的苦痛と共感を基にした罪悪感を親の誘導的なしつけがあれば、子供の道徳性を発達させると説いた。

ハーバード大学の心理学者カガンは、道徳性の発達を三段階に分けた。

第一 罰せられた行為を抑制できる
第二 禁止された行動を表象できる
第三 共感・恥・罪悪感などの情動をもつ（二歳の終わり頃）
第四 良い・悪いの意味的概念を獲得する（三歳の初め頃）

第五 社会的カテゴリー、性別・階級、国籍などの道徳的義務を受け入れる（四歳から六歳頃）
第六 公正と理想の概念を理解する（学童期）

カガンの説に注目すべきは、第三・第四段階で、特に共感・恥・罪悪感などの情動が二歳の終わりごろまでに培われ、良い・悪いがわかってくるのは三歳の初め頃までに形成されると述べている。現在のいじめっ子に一番欠けているのは、いじめられっ子への共感への欠如であって、そしてその良し悪しであって、道徳教育の基盤は三歳までの家庭教育にあることを示唆している。

ドイツの進化人類学者であるマイケル・トマセロは、その著作『ヒトはなぜ協力するか』で、人間の道徳は「協力」の一形態と仮定して大型類人猿、初期人類、現代人類と比較して、「協力」と関連する五要素「公社会性」「認知」「社会的相互作用」「自己統制」「理性」の観点か

ら、道徳の起源と、人間の道徳性の発達を説いた。そのことから人間の道徳は、「共感」して「協力」する人間の心と行為に要約できる。道徳を従来の哲学や倫理学の概念からではなく、人類の「進化倫理」という新たな視点から捉え直す必要がある。

直感・感性・情緒の大切さ

数学者である桜井進氏は、日本人の脳を形成しているのは、数のリズムだと述べている。また、医学者角田忠信さんは、日本人と西洋人の感性の受け止め方が、左脳・右脳で違っていると述べている。例えば「静けさや岩にしみいる蟬の声」が、西洋人では受けとめがたく、日本人独特の感性で受けとめる。それは文化観に由来するものである。

日本外科学会の名譽会長の井口潔教授は、その著『人間力を高める脳の育て方』で、江戸時代の幼年教育のテキスト「小学」の「素読」が、「清掃、応対、進退」という作業と作法の両面から教えた教育理念が高く評価している。そして、武士道精神に裏打ちされた道徳教育の伝統が日本を救ったと述べている。

その意味で日本人としての生きる力を、伝統・文化・歴史や文化感覚から見直す時期にきている。

共感脳と、リズム運動

1990年、イタリアのパルマ大

学で、脳細胞のミラーニューロンが発見された。ミラーは「鏡」、即ち脳が「直感的に相手を理解する能力がある」ことを証明した。

アムステルダムのカリスチャン・ギザーズは『共感脳―ミラーニューロンの発見と人間本性理解の転換』で、ある行動を見ること・聞くこと・実行することの運動をして、脳細胞は直感的に理解するとしている。

それによると、利他行動をやっている子どもが利他行動を観察すると、周囲の子どもが利他行動するようになり、その子が他の子から利他行動されるようになる。このことから、立派な価値を何度理性的に教えても、それは建前に終わってしまふ。子どもは人に与えられると、与えられるということを直感的に把握する。道徳的な行動を促すには「共感」が大切なのである。

アメリカの神経哲学者ジョンシュア・グリーンは『モラル・トライズ―共存の道徳哲学』で、認知心理学・進化心理学の発達によって、道徳は大脳組織に組み込まれており、道徳中枢そのものはないが、道徳的課題に応じて独自の神経ネットワークありと述べている。

命のつながりの重要性

私は生命のつながりの自覚をどう高めるかが、道徳教育の課題と考え

ている。モラルサイエンスの立場から、生命のつながりに欠けているものは、国の生命、歴史の生命、日本人として生きる力、縦(祖先・歴史)の命のつながり、横の命のつながり、それらを再構成することが一番大事なことである。そして、主体性という言葉も、他から切り離された主体性ではなく、縦や横のつながりがある自覚の中で、自分が生かされていることに気づくこと、これが日本の文化観であり、問い直さなければならぬことである。

ジョナサン・ハイトの問題提起

アメリカ気鋭の心理学者のジョナサン・ハイトは『社会はなぜ左と右に分かれるのか―対立を超えるための道徳心理学』で次のように述べた。

左・右の対立の原因は、価値観・世界観を方向づける「道徳基盤」にある。①ケア②公正③自由④忠誠⑤権威⑥神聖に類型化し、リベルの左派は①②③を重視するが、④⑤⑥には重きを置かない。右派の保守主義は①から⑥まで全ての道徳基盤を調和させようとする。右派は六つの道徳基盤を直感的論争に志向し、左派は三つの基盤で理性的論争を志向するが、左派は基盤が狭いという。

では、なぜ対立が激化するかと云えば、ハイトは進化生物学の知見から、「人間は90%が猿であり、10%

はミツバチである」と、人間の行動は9割利己的であるが、人間の遺伝子に組み込まれた「ミツバチスイッチ」が入ると、女王バチのために巣を作り、自己犠牲をおしまない行動をする。

ハイトは、「情動」と「思考」を「象」と「象の乗り手」にたとえ、「人間の心を動かしているのは象(直感・情動)であり、「象の乗り手」(思考・理性)は行動の後付けしている」と。今までの道徳教育は、象から降りた乗り手だけで問題を解決できるように訓練してきたところに深刻な誤りがあると指摘しているのである。

ホリスティック臨床心理学の視点
臨床心理学の立場から道徳教育を見直す必要があると考えている。

「問題児」の「問題行動」が「例外的」とらえるのではなく、教師や親などが、指導者としての本質的な課題は何なのかを問い直すのである。

ホーリズムの提唱者J・S・スマッツは『ホーリズムと進化』の中で、人間本来もっている自律的秩序形成機能が「生きる力」であり、全ての子どもにも道徳性の発達力があると述べている。本来反抗したくて反抗している子どもは一人もない。反抗してざる得ない環境があつて、反抗している。

道徳教育は、子どもの発達段階に

応じて、どうかかわつたらよいか。それは「保証」することであり「強制」ではない。そのためには科学的知見の理解を深めることが重要である。古典にある「天地の化育」「天功を助く」という観点から道徳教育を見直すことが必要である。

平成28年に先進国G7倉敷教育大臣会合で、慶応義塾大学(文科省大臣補佐官)の鈴木寛教授は、「教育のイノベーション」をテーマに「創造社会」へのパラダイムをめざして、「脱近代」「ポストモダン」ではなく、近代を重視しながら「卒近代」という用語を使用している。重要議題だった「共通価値の尊重」で、議長国の日本が「生命の尊重」を最優先したところ、昨年のユネスコ会議で「自由と民主主義」などが「命より大事だ」と反対していたフランスやアメリカが賛成に回った。欧米における深刻なテロ事件等が、「生命尊重」という価値を、共通の価値として形成されたのであろう。

これからは「生命のつながりの自覚」をもとに自己実現をしていくという大きな目標をもつこと、それは道徳を核として日本人としての生きる力を各教科の枠を超えて、進めて行くことが、モラルサイエンスとして求められる。(これは記念講演の要旨である。文責 浅野義英)

日本教師会
第59回教育研究大会 報告

期日 令和元年八月三〜四日

場所 ハートフルスクエアG

主催 日本教師会

主管 岐阜県教育懇話会

後援 岐阜市教育委員会

主題 「新しい時代を切り拓く
国民教育の在り方を求めて」

〈一日目〉

開会式は講師の麗澤大学特任教授の高橋史朗先生と全国教職関係神職協議会副会長の寶来茉佐子先生を来賓に迎えて午後一時過ぎに開会した。

最初に若井勲夫会長より挨拶があり、日本教師会の新しい歩みと岐阜県教育懇話会の貢献を紹介しながら、教師は文化職であり、先人に学びながら自己を高め、児童生徒の指導に当たらなければならないと会員の目



指すところを示された。地元を代表して岐阜県教育懇話会の山口三男会長より、岐阜が主管す

るのは七回目となるが、稲川・村瀬両先生の遺志を継いでいる。本大会の主題にそった成果を期待していると挨拶があった。

記念講演は高橋史朗先生で、「モラルサイエンスに基づく新たな道徳教育の樹立を目指して」と題して、最新の脳科学や心理学の成果を紹介し、これからの道徳教育の在り方を提言された。(要旨は前頁に掲載)

続いて実践交流に入り、最初に三重県伊賀市立府中小学校教諭の溝口哲志先生が「PBISを用いた道徳教育の実践」を発表された。

先生は教師暦数年の若い教師だが、学級崩壊をした学級を受け持つて見事に立て直したという体験がある。それをPBISというアメリカで開発された生徒指導の考え方で理論づけ、子供達の心を解放し、日常的に道徳教育の実践をしたのである。

学級崩壊やいじめの原因は児童が自己肯定感を失っていることにあると考え、一人一人が学級に認められ自信を回復する方法を工夫した。

「ポジティブカード」でお互いに事実による称賛をし、「道徳カード」で教師が子供の言動を誉めるなど、学級全体で互いの良さを認め合う活動によって児童の自己肯定感が高まり、学級の雰囲気も道徳的に良くなっていったという。

中学校の実践は、大阪府の浪速中学校高等学校教諭の松尾大輔先生で、「神道教育の可能性―こころづくりの時間として」と題して発表された。

最初に勤務校は神道を建学の精神としていた学校であると紹介された。神道教育は総合的な学習の時間に位置づけられ、一年生で神宮を学ぶために伊勢合宿を行っている。二年生では「古事記」を学び、「天皇」について調べ学習をしている。こうした日本の伝統文化に触れ、人間の力をこえたものに対する畏敬の念や宗教的な情操を育て、正しい心をもつ

自立的な生徒の育成を進めていた。一日目の最後は総会で、平成三十年年度の事業と会計決算報告、令和元年度の事業と予算の計画を審議した。それぞれ原案通りに可決し、来年度の教研大会は関西地区開催となった。

〈二日目〉
最初に阪南大学教授の平山弘先生の、「教育現場で大切なこと―踏み込む勇氣と場を察知する対応力―」と題した講話があった。

先生は元公立高校の教師として商業科のクラスを持っていた。普通科に比べて学習意欲が低く、学力も低

迷していたが、担任として三年間の指導により一人一人に夢と自信を与え、オリンピックに出る生徒や国際的な音楽家になる生徒を出し、学級

の三分の一が国立公立大学に進学するという実績をあげられた。

担任に必要な指導力は、教科指導と生徒指導、進路指導だとされた。

教科指導は生徒の信頼を得る場であるとして、授業の一場面を紹介した。生徒指導の例では最初にいじめは絶対に許さないと宣言し、もしそれに類する事象があれば即全体に指導し、個別の指導もした。また教室の黒板管理を生徒に徹底させ、他の教諭に学級や生徒が誉められるようになり授業も良くなることを実感させた。進路指導では生徒は単線しか考えないので、いろいろなルートを知らせることが必要だとして自衛官を目指した生徒の指導例をあげた。

担任は常に生徒の気持ちを把握し、指導にあたっては優先順位を間違えない判断力や演技力も必要だと強調された。

続いて高等学校の実践発表で、岐阜県済美高等学校講師の渡邊威先生より、「教師及び国語科教師としての責務」と題した自身の理想とする教師像を情熱的に発表された。

閉会式では来年の教研大会を主催する大阪府教師会の中曽邦輔会長より十一月開催の表明があり、再会を期そうという佐々木副会長の閉会の辞と、「日本教師会のうた」斉唱で大会は締めくくられた。

H